# 大伴旅人「讃酒歌十三首」考

岡田喜久男

大宰の帥大伴の卿の酒を讃むる歌十三首

338 験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし

339 酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ

340 古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし

341 賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣きするしまさりたるらし

342 言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし

343 なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ

344 あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る

345 価無き宝といふも一坏の濁れる酒にあに益さめやも

346 夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも

347 世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣きするにあるべかるらし

348 今の世にし楽しくあらば来む世には虫にも鳥にもわれはなりなむ

349 生ける者つひにも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな

350 黙然をりて賢しらするは酒飲みて酔泣きするになほ若かずけり

漸やく晩年になってその歌才を発揮した名門大伴家の棟梁大伴旅人は、万葉集に唯一回だけ自分の名前を漢風に大伴淡等と明記しているだけである。個性の花が豊かに美しく咲き誇った万葉第三期の歌人達の中にあって真に貴族の名に価する人であり、歌は暢達で美しい。宮廷歌人や下級官人達が営々として歌で心を遣る時代にあって、余裕の中に憂情と幻想を詠む旅人の歌は、伝統的な名家の尊厳と、時代の新しい波である中国文学の影響との交差の中に生れたものであった。その旅人がただ一回自己の不断の詠みぶりをふり捨て、特異な題材を、強烈な口調と斬新な発想で歌い綴ったものがここで論じようとする「讃酒歌十三首」であった。万葉集における旅人の歌は、大宰帥時代のものが殆んどであるが、続日本紀と懐風藻を調べる事によって、彼の経歴はほぼ把握する事が出来る。続日本紀初出の元明天皇和銅三年正月朔日の条に

天皇御二大極殿一受レ朝。隼人蝦夷等亦在レ列。左将軍正五位上大伴宿禰旅人。副将軍……

とあるように、彼の本領は武人であって、元正天皇養老四年六月の詔りの中でも持節将軍正四位下中納言兼中務卿大伴宿禰旅人は大いに賞讃されている。万葉の歌で見る限り、武人旅人の面影を窺う事は出来ないが、家持における武人意識を考えると、父旅人の実生活における活力の根源は武門の第一人者としての誇りにあったのではなかろうか。然し、風巻景次郎氏が家持の文学的開花の原因を

奈良朝時代を貫くものに藤原大伴両氏の激しい闘争がある。藤原氏にははじめから大陸文化輸入者としての態度があり、大伴氏には最後まで土豪的英雄の家の感じがあるが……（中略）。父旅人は大宰帥から大納言で終わり、子の家持は『万葉集』二十巻の最後の歌を詠んだとき、ようやく但馬守であった。旧家の名族大伴氏の上として立った家持は、氏族全体の頽勢を身に感じながら、どうにもすることが出来ない。そして孤立無援の煩悶に虐げられる。保守的な名族の崩壊して行く運命のもとで、かえって内へ〳〵と内省して行く主体が成立する。この保守的な宿命の下で、およそその氏族的な誇りや観念やとかけはなれた内省的な個我が目覚め、類型的な民謡風の和歌を転じて、孤独の抒情詩を完成する。（風巻景次郎全集３　P326）

と見事に解説されたように、父旅人における氏上としての誇りと自負もまたむなしく憂悶となり、文芸への志向を生じて行った。然しその事は旅人においては歌の中に明確に認められるのではなく、まだ契機としての意味が感得されるだけである。旅人の作品は大きく見て三群に分ける事が出きる。

第一群は「大伴淡等謹みて状す」に始まる「藤原房前へ琴を送った歌」（810・811）や「松浦川に遊ぶ序以下の歌」（853～863）等の幻想味溢れるフィクションの世界を歌ったものである。第二群は、「凶問に報ふる歌（793）を最初に帰郷後も歌われた、謂わゆる亡妻哀傷歌であり、第三群はここで採り上げている讃酒歌十三首である。前二群は序文の出典や構成について問題点はあるにしても、歌自体について見れば分りやすい平易な歌である。それに対して、讃酒歌十三首は、歌自体の中に典拠が含まれている点、「讃酒」と言う集中独特のテーマを連作している点、その詠み方の激烈な事、全十三首が緊密な構成を持っているかどうかなど多様な面と問題点を孕んでいる。今日もなお、讃酒歌の構成をどう考えるか、歌われた時期と場の関係をどう考えるか、歌われた目的と歌の解釈など新しい論議を呼んでいるようである。又讃酒歌を詠んだ時の旅人の心境がいかなるものであったのか、何の理由でこの多数の統一テーマによる連作を詠んだのか、と言う点についても、研究者によって夫々見方や評価の分れる所である。文学がすぐれたものであればある程、作者の手から離れて一人歩きをし、読者の一人一人の胸中に新たに生れかわる筈であるが、「讃酒歌十三首」も、成る人にとっては「知識的即興歌であって、彼の生の切実な表現であるとは思はれない」（『万葉集とその前後』久松潜一）であり、又或る人にとっては「悶々の情を酒に慰めようとする、この高貴な一老人の哀憐すべき生活が描き出されている」（『万葉集全註釈巻三』武田祐吉）作品と受け取られるのである。両者の中間的な立場でありながら私が最

も頷ける評は、澤瀉久孝氏の『万葉集注釋㈢』における次のような言葉である。

以上十三首には老後に遠く都をはなれ、妻をも失った寂しさや不平も窺へるが、しかしさうした憂悶をやる為のすさびとのみは言ひ難く、もつと明るく積極的な讃酒の心が根底にあり、「賢しら」を三度まで罵倒してゐるところにも当時の習俗に対する反感も認められ、大宰の長官たる身分としては、思ひ切つたものいひをしてゐる点が注意せられてよい。

私の以下の論は実は、讃酒歌の性格を私なりに決定しようとする試みから導かれたものであり、特に澤瀉氏の言われる「明るく積極的な讃酒の心」「当時の習俗に対する反感」「大宰の長官たる身分としては、思ひ切ったものいひをしている」の部分はまさに同感であとと同時に、それが生み出され歌い出された理由に大いに興味を覚えるのである。「賢しら」を否定し、「酔泣き」を讃美していながら、何故に「明るく積極的」であり得たのか。果して大宰帥大伴卿が公然と仏教を謗り、来世を否定し、酒に酔い泣きする事だけを讃美し得たのであろうか。その点を以下解明しようとするのである。

所で讃酒歌の旅人における特異性を明らかにする為には、その前に旅人の人間性と歌人像を知る必要がある。旅人が大宰府にあった時代を中心に詠み出された歌を大宰府圏の歌と呼び、当時筑紫歌壇と呼ばれるものが存在したと言われる。確かに、大宰帥大伴旅人、少弐小野老、大典麻田陽春、造筑紫観音寺（現観世音寺）別当妙弥満誓、筑前守山上憶良、筑後守葛井大成、等が九州にあり、政務の上では勿論、梅花の宴の歌三十二首に見られるように旅人を中心に宴を催す事も屢々であったようである。今日の万葉を見た人がそう思うだけでなく、吉田宜が旅人への返書の中で

梅花の芳席に群英藻を摛べ、松浦の玉潭に仙媛贈答せるは、杏壇各言の作に類い、衡皐税駕の篇に疑ふ

と言うように、同時代の心ある人々の認める所であった。このような多士済々の観を為すに致ったのは偶然もあったかもしれないが、その中心に大伴旅人と山上憶良がなければ決してその盛興を迎えることはなかった。更に二人を比べてみると、なるほど文学的才能や文章、詩歌の量的なものでは或いは憶良の方が優勢であろうが、「宴を罷かる歌」（337）や「憶良い聞く、方岳諸候と都督小史……」（868）の歌に見られる如く、憶良の性格は歌壇の中心にあって指導的役割を果す人ではなかった。その反対に旅人は、「梅花謌三十二首」の誕生や「松浦川に遊ぶ」歌を生む場を設けたり、部下である丹比県守の為に待酒を醸もして待つ愛情を示すこともあった。その度量の広さとおだやかな人柄は広く人々から慕われ、大納言として上京する折は部下から別れを惜しまれ多くの歌を贈られたが、中には遊女児島も歌を贈り、旅人はそれにも丁寧に返歌をしている。更に沙禰満誓は旅人の上京後も贈歌をして、旅人を送って白髪に変じた悲しさを歌っている。このような信望の厚い大伴旅人を中心として筑紫歌壇は形成され、巻三巻五に残るすぐれた歌が詠み出されたのであった。

ところで旅人自身の歌人としての生涯を万葉集の中で辿ってみると、神亀元年作と推定される「奏上されなかった吉野讃歌」（315）

（316）に始って、「三年辛未、大納言大伴の卿の、寧楽の家にありて故郷を思ふ歌二首」の天平三年作の歌に至るまで僅か七年間の作歌活動であった。さらに吉野讃歌（315）（316）を除くと全く大宰帥時代の歌中心と言ってよい。煩をいとわずその歌を挙げると次のようになる。

一、帥大伴卿歌五首（331～335）

（331）　わが盛また変若ちめやもほとほとに寧楽の都を見ずかなりなむ　（他四首）

二、大宰帥大伴卿報三凶問一謌一首（793）

三、大帥大伴卿和謌一首（1473）（石上堅魚へ）

四、神亀五年戊辰、大宰帥大伴卿思三故人一歌三首（438 439 440）

438　愛しき人の纏きてし敷細のわが手枕を纏く人あらめや

右一首、別去而経三数旬一作謌

439　還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ

440　京なる荒れたる家にひとり寢ば旅に益りて苦しかるべし

右二首　臨三近向レ京之時一作歌

五、讃酒歌十三首（338～350）

六、帥大伴卿和謌一首（956）（石川足人へ）

七、大宰官人等奉レ拜三香椎廟一訖　退帰之時、馬駐三于香椎浦一各述レ懐作謌　帥大伴卿謌一首（957）

八、帥大伴卿遙思三芳野離宮一作謌一首（960）

九、帥大伴卿宿三次田温泉一聞三鶴喧一作謌一首（961）

十、贈三大弐丹比県守卿遷三任民部卿一謌一首（555）

十二、歌詞両首（806 807）（京人への歌）

806　龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて来む為　（他一首）

十二、日本琵琶一面を房前へ送る（810 811）

十三、梅花謌三十二首関係歌（822 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863）

十四、松浦河に遊ぶ歌（871 872 873 874 875）

十五、松浦佐用比売の歌（1541 1542）

十六、萩の花の歌（1639）

十八、冬日見レ雪憶レ京謌一首（1640）

十九、児島に和えた歌二首（967 968）

倭道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも　（他一首）

二十、天平二年庚午冬十二月、大宰帥大伴卿向レ京上道之時作謌五首（446 447 448 449 450）

二十一、還三入故郷一家、即作謌三首（451 452 453）

二十二、大納言大伴卿　新袍贈三摂津大夫高安王一謌一首（577）

二十三、大納言大伴卿和謌二首（574 575）（沙禰満誓の二首に対して）

二十四、三年辛未大納言大伴卿　在三寧楽家一、思三故郷一謌二首（969 970）

969　須臾も行きて見てしか神名火の淵は浅せにて瀬にかなるらむ

970　指進の栗栖の小野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ

以上に吉野讃歌二首を加えて七十六首の長短歌をあらためて調べ

てみると、先に三類に分けた事が妥当であり、中でも望郷歌を含めて亡妻を悼む情の深かった事が感じられる。又その亡妻哀傷歌の作歌年代を調べてみると、神亀五年に大宰府についてまもなく妻大伴郎女を亡くし「凶問に報える歌」などを詠み（二・三・及び四の（438）天平二年大納言となって上京の道につく時になって再び妻を思い出して（四の439 440 二十・二十一）いる事が分る。その間天平元年から翌二年の末まで、旅人の詠んだ歌は、「琴を房前へ贈る歌」（810 811）や「梅花謌三十二首及び序」「松浦河に遊ぶ歌」「松浦佐用比売の歌」が続々と詠み出される。以上の歌には、手紙文・序・物語文が付いており、それは豊かな幻想性と中国文学の影響によって美しく彩られている。

さて今述べた二点、すなはち、亡妻哀傷歌が大伴郎女の死後まもなく詠まれてから、上京の時に再び歌われている点および、その間に序などの漢文の文章に彩られた中国文学の影響下にある幻想的な作品がはさまれるように生み出されている点を考え合せると、私には次のような試案が浮かんで来るのを禁じ得ない。それは、讃酒歌が詠まれたのは、前半の大伴郎女の死を悼む歌と、幻想的な作品群の詠まれるようになる中間の時期に詠まれたのではないか。すなわち大伴郎女の死に悲しむ旅人が、異母妹大伴坂上郎女の大宰府到着によって慰さめられ、帥本来の役目を果すような生活を取り戻し、幻想的な作品まで生み出す途上の、しかも非常に私的な作品群として讃酒歌十三首は詠まれたのではないかと言いたいのである。もっとはっきり結論を言えば、讃酒歌十三首は、憶良の「宴を罷かる歌」や「子等を憶う歌」などとは相入れない世界を意識している旅人が大伴家の家刀自的存在であり、豊かな文才と美貌の持主である異母妹坂上郎女に向って、心を開き、一面では戯れ、一面では笑い、もっと深い所では泣きながら心中を歌ったものと考えるのである。私人となって寛ろぐ旅人が酒を飲み、坂上郎女一人に向って次々と詠んでは示し、又更に詠み、たちまちに十三首の歌を成したように思えてならない。以上の事は、大きく二つの点を明かにする事で証明できるように思える。第一点は、讃酒歌が作品的に神亀五年から天平元年十月の「日本琴を房前へ贈る歌」までの間に生まれたと言い得るものであるか。第二点は、異母妹であり、或いは恋愛関係すらあったのではないかと言われる坂上郎女に私的に示したと考える事が果して可能かどうかである。まず前者について考えると、この讃酒歌が、幻想的な作品群の前に位置すると考えるのは大いに妥当な事であると思われる。それは、

第一に序や説明文を持たず、他に何の関係歌もなく詠まれている

第二に、中国文学と仏教の影響が極めて強く、明かに創作意識を持って別世界を歌おうとしている事。

第三に妻の死を悲しむ心もやや静まりつつあったが、然し酒にその悲しさを別れようとする姿勢も見過す事が出来ない。

第四に、全く虚構の世界を現出してはいないが、十三首の連作と言う新しい試み、然も極めて普遍的である素材「酒」をして極めて特殊な「讃酒歌の世界」を描く事に成功している点。実生活の中における酒の根本的な意味をあくまで追求して、ついに抽象的な世界を描いているこの讃酒歌が単なる感動によって詠まれたものでない事は言うまでもなかろう。

このような作品自体の持つ存在意義とともに、神亀五年前後について見ると、更にこの讃酒歌の詠まれる必然性が増してくるのである。養老四年の藤原不比等の死により長屋王の時代の幕が上がった。やがて左大臣長屋王のもと、中納言大伴旅人、右大弁笠麻呂（沙彌満誓）、右中弁小野老の名が見出される。爾来十年、旅人以下の三人は六十代にして大宰府に集まり、長屋王は天平元年「左道を学び、国家を傾けようとしている」と言う密告によって宇合等によって自尽させられてしまった。旅人が長屋王をどの程度頼りにしていたかは疑問なしとしないが、少なくとも藤原四子の勢力をこれまで以上に認めざるを得なかったし、事実神亀五年に置かれた中衛府の大将に天平二年房前が任じられた事はその感を決定的なものとした。征隼人持節大将軍として勇名を轟かせた大伴旅人も時代の趨勢を押し止める事は出来ず、やがて辞を低くして琴を贈り房前の意を迎える事となった。以上のように考えると、讃酒歌の成立は、天平元年二月の長屋王の変以降、「日本琴一面を房前へ贈る歌」の詠まれた同年十月までの間に、しかも類同語句の多用、文末詞の一致、発想の統一性などを考え合わせると、かなり短い間に詠まれたと思われる。以上の事から、作品自体から、社会的背景から見て「讃酒歌十三首」が生み出されたのは天平元年前半期と見てそれ程おかしくはないと思われるが、その歌が、異母妹坂上郎女一人に示される独詠であったと考える事が妥当かどうか少し考えてみたい。大伴郎女の死後坂上郎女が旅人や家持の世話をする為に大宰府に赴いた事は確かである。その時期ははっきりしないが、

一　冬十一月（天平二年）、大伴坂上の郎女の、帥の家を發ち（たち）上道（みちたち）して、筑前の国宗形の郡名兒山を超えし時作れる歌一首（963）

一　同じ坂上の郎女の、京に向ふ海路に濱の貝を見て作れる歌一首（964）

他の歌で、旅人が上京の頃には確実に大宰府にいた事が証明できる。その大宰府到着時期を天平元年前半の頃とするのも不可能ではないと思うがいかがであろうか。又、女性である坂上郎女に対して酒の歌を詠んで見せるのもややそぐわない感がないでもない。然しながら、坂上郎女は一般の女性と言うよりも、大伴氏の家刀自とも言うべき人で

大伴坂上の郎女の、

995　斯くしつつ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく

をはじめとする「宴の歌」も多く、彼女自身も酒を嗜んだようで、旅人とともに酒を飲んで鄙にある悲しさを慰さめ合ったとしても不自然ではない。又旅人は

丹生の女王の　大宰の帥大伴の卿に贈れる歌二首

553　天雲の遠隔（そくへ）の極（きはみ）遠けども　情（こころ）し行けば恋ふるものかも

554　古りにし人の食（を）さする吉備の酒病めばすべなし貫賛（ぬきすたば）賜らむ

の歌でも分るように、女性である丹生の王に吉備の酒を贈った事が大宰の帥時代にあった。酒を好むこと、酒を讃美することは男性の領分のものかもしれないが、それを十三首もの短歌に歌いあげる事が果して男性的な行為かとなるとはなはだ疑問である。丹生の王に酒を贈った旅人は、異母妹には讃酒の歌を献上してその無聊を慰さめた。しかもそれは胸中に蟠まっている様々な悲しみを最も理解してもらえると言う安心感のもとに詠まれたものであったから、仏教

の教えも、官僚としての規制も全く気にする事なく歌われているのである。従来この讃酒歌が生れた契機としては、憶良に対抗する意識、就中「字等を思ふ歌」（802 803）や「宴を罷る歌」（337）の名前が具体的に摘げられている。然し、貴族的なと言うより、まさに貴族であり学才があり、曽て武名を轟かせた風流の人旅人が、公的な席でこの歌を披露したと考えることは私にはとうてい出来ない。さきに挙げたいくつかの歌を見ても、「讃酒歌十三首」以外の歌の、おだやかで、流れるような格調は気品の高さと清明さを強く感じさせるものである。それが讃酒歌においては「猿を持ち出して賢しらをする人を罵倒し」（344）、世を挙げて仏数をもてはやす時に、高級官僚たる大宰帥大伴旅人が「無価宝珠（仏法）を一杯の酒に勝らない」（345）と言い、「今が楽しくあれば来世では虫でも鳥でもかまわない」（348）などと公言出来たであろうか。制度上も又旅人の性格的にもいかに「酒の事」であるからと言ってこのような歌が公然と披露出来たとは信じられない。六十以上の老齢に加え、権門の棟梁が遙任でなく自ら北九州の地に赴き、愛する妻を失い、曽っての上司長屋王を失ったと言うまさに内憂外患の悲痛な叫びは、「讃酒歌十三首」としてほとばしり、肉親に向けて発せられたのである。旅人の文学的な存在を見ると、

一、和歌と漢文との融合
二、思想語彙や故事の引用による発想の拡大
三、特殊なシチュエーションにおける幻想的世界の創造
四、伝説を素材とする空間と時間の豊穣化
五、短歌の重層化における効果の追求

など、多彩な試みがさりげない形で行われていて、殆んど同じ事を行った憶良の露骨さと比べて、資質的な差以上の差を感じさせるのである。旅人は最初にも述べたように、余裕のある、風流風雅の行為として歌や文章を生み出しているように思われる。そのような文学観、或いは作歌態度を生み出した一つの大きな原因は、中国文学の影響、中国思想の侵潤にあった。大宰府歌圏での歌の特徴として中国文学の摂取や散文化を容易に指摘できるが、それは大宰府の果した役目の一つが、外国人との接触であり、最新の文物が直接的に入って来ると言う環境だったからであった。「讃酒歌十三首」は、天平元年前半期に、異母妹大伴坂上郎女に向けて、ある時極めて短い間に詠み出されたのではないか、と考える私見は、以上述べたような間接的な論拠だけで言えるものでは勿論ない。更に作品自体の厳密な考察によって裏付けが為されねばならないが、今は私見の一端を提示することで筆を擱く事にする。